

[A年]受難節第1主日(2021年2月21日)**【旧約聖書日課】申命記 30章15～20節**

¹⁵見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。¹⁶わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。¹⁷もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、¹⁸わたしは今日、あなたたちに宣言する。あなたたちは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、長く生きることはいない。¹⁹わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、²⁰あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。

【使徒書日課】ヤコブの手紙 1章12～18節

¹²試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。¹³誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言うてはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。¹⁴むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。¹⁵そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。¹⁶わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。¹⁷良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。¹⁸御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ**申命記 30章15～20節**

¹⁵見よ、私は今日、あなたの前に命と幸い、死と災いを置く。¹⁶私が今日命じているとおり、あなたの神、主を愛し、その道を歩み、その戒めと掟と法を守なさい。そうすればあなたは生きて、その数は増える。あなたの神、主は、あなたが入って所有する地であなたを祝福される。¹⁷しかし、もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされ、他の神々にひれ伏し、仕えるならば、¹⁸私は今日、あなたがたに宣言する。あなたがたは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、入って行って所有する土地で長く生きることはいない。¹⁹私は今日、天と地をあなたがたに対する証人として呼び出し、命と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選びなさい。そうすれば、あなたもあなたの子孫も生きる。²⁰あなたの神、主を愛し、その声を聞いて、主に付き従いなさい。主こそあなたの命であり、主があなたの父祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地であなたは長く生きることが出来る。

ヤコブの手紙 1章12～18節

¹²試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格な者とされ、神を愛する者に約束された命の冠を受けるからです。¹³誘惑に遭うとき、誰も「神から誘惑されている」と言うてはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、ご自分でも人を誘惑したりなさらないからです。¹⁴人はそれぞれ、自分の欲望に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。¹⁵そして、欲望がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。¹⁶私の愛するきょうだいたち、思い違いをしてはなりません。¹⁷あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の源である御父から下って来るのです。御父には、変化も天体の回転による陰もありません。¹⁸御父は、御心のままに、真理の言葉によって私たちを生んでくださいました。それは、私たちを、いわば造られたものの初穂とするためです。

(新共同訳)

【福音書日課】マタイによる福音書 4章1～11節

1さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、「霊」に導かれて荒れ野に行かれた。2そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。3すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」5次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、6言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』

と書いてある。」7イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。8更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、9「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。10すると、イエスは言われた。「退け、サタン。

『あなたの神である主を拝み、

ただ主に仕えよ』

と書いてある。」11そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マタイによる福音書 4章1～11節

1さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた。2そして四十日四十夜、断食した後、空腹を覚えられた。3すると、試みる者が近づいて来てイエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではなく

神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる』と書いてある。」

5次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の端に立たせて、6言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると

彼らはあなたを両手で支え

あなたの足が石に打ち当たらないようにする』

と書いてある。」7イエスは言われた。「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある。」

8さらに、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその栄華を見せて、9言った。「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これを全部与えよう」と10すると、イエスは言われた。「退け、サタン。

『あなたの神である主を拝み、

ただ主に仕えよ』

と書いてある。」11そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが近づいて来て、イエスに仕えた。

福音書並行箇所(ルカ 4:1～13 新共同訳)

1さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、2四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。3そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」4イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。

5更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。6そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。7だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」8イエスはお答えになった。「『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」

9そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。10というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかり守らせる。』11また、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』12イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と書かれている」とお答えになった。

13悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・2月21日「受難節第1主日」の日課主題は「荒れ野の誘惑」。「受難節」を「復活日(イースター)」前の日曜日を除く40日間として定めるようになったのは、主イエスの「荒れ野の誘惑」が「四十日間」であったという伝承に基づくものである。そこで、「受難節」の最初の主日には、福音書日課として「荒れ野の誘惑」伝承が定められてきた。

・主イエスの「荒れ野の四十日」は、一般に、旧約の「出エジプト物語」伝承においてイスラエルの民がモーセに率いられて40年間、荒れ野の旅を続けたことになぞらえた期間として説明される。しかし、より厳密に「四十日間(四十日四十夜)」の典拠として意味を持つのは、同じ「出エジプト物語」伝承の中でも、モーセがシナイ山で律法を授与されるために過ごしたとされる「四十日四十夜」(出 24:18)である。モーセは、「金の雄牛事件」の後に「掟の石の板」を再授与してもらう際にも「四十日四十夜」、山にこもったと語られている(出 34:28)。「四十日」を「四十年」の典拠とするという点では、モーセが派遣したカナン偵察隊の偵察期間としての「四十日」(民 13:25)で、この偵察結果の報告を受けて民がカナン侵攻を拒絶した結果として「四十年」の荒れ野生活が課せられたと説明されている(民 14:34)。

・「四十日」については、他に、「ノアの洪水」伝承の中でノアが箱舟の扉や窓を閉ざしていた期間(創 8:6)、「ヤコブ物語」伝承の中でエジプトに移住してそこで死んだヤコブの遺体防腐処置に要した日数(創 50:3)、「ダビデ物語」中の「ゴリアト伝承」でベリシテ軍がイスラエルに圧力をかけた日数(サム上 17:16)、「預言者ヨナ物語」でヨナがニネベの人びとに神の裁きを告げたときの猶予期間(ヨナ 3:4)など、象徴的な日数として繰り返し現れる。

旧約日課(申命記 30章より)

・「申命記」は、旧約正典中「律法」の書の第5巻と位置づけられる文書である。「モーセ五書」と称せられることもある「律法」5巻は、全体として明確な意図をもって編集編纂されて現在の形式が整えられたことは明らかであるが、それぞれの文書の成り立ちは必ずしも同じではないと考えられる。すなわち、第一に「創世記」を構成する「原初史伝承」と「族長物語」、「出エジプト記」から「申命記」までの大枠としての「出エジプト物語伝承」、「申命記」の主要部を構成する「出エジプト物語伝承」を前提としモーセの訣別説教という形式を取った「原申命記文書」などが組み合わされて、「律法」5巻が編集編纂されたと考えられる。一方、「申命記」中の「原申命記文書」は、旧約正典中「前の預言者」の書(「ヨシュア記」から「列王記」まで)や「後の預言者」の書(「イザヤ書」から「マラキ書」まで)の編集編纂の歴史と密接な関係があると考えられる。お

そらく、正典として知られる「申命記」は、これらの編集編纂の営みの中で「律法」の書と「預言者」の書の全体を結合させる位置を与えられ、内容構成を整えられたものと考えられる。

・日課箇所を含む29~30章は、「申命記」中、28章までとは区別されて追加で置かれたものとなっている。「申命記」自体の説明では、28章までで語られた内容が「ホレブ」すなわち「シナイ山」で授与された律法(教え)の再確認であるのに対して、29~30章は「モアブの平野」で締結された契約の内容である。「モアブの平野」で主が語られたとする事柄は、「民数記」の終結部で繰り返し語られており(民 33~36章)、「申命記」もモーセが「モアブ地方」で「この律法を説き明かし」たものとして始められている(申 1:5)。これら「モアブ」と結びつけられた内容は、「シナイ山」と結びつけられた内容が「シナイ契約」と呼ばれるのに対して、「モアブ契約」として区別されることがある。

・日課箇所は、モーセが出エジプト後二世代目のイスラエルの民に対して、モーセの死後に入っていくであろう「約束の地」での生き方を、主なる神に従う姿勢から離れずに保つように教えているが、彼らの生き方の姿勢は彼らの親世代(第一世代)の経験した神の恵みの御業の出来事に基礎づけられる、と教えるのが「申命記」を貫く視点である。それゆえに、彼らに対しては、次世代(第三世代)に対して同様の信仰経験の物語を告げることによって果たすべき責任がある。新しい世代が神に従う信仰に立つことができるかどうかは、前世代までに経験された御業の出来事の物語を継承することができるかどうかによって大きく左右されるのである。それを根源的に突き詰めていくとき、日課箇所は、自分たちの先祖である族長たちに対する神の約束が、後の世代の自分たちにもなお有効であるという、世代を超えて持続する信仰共同体のあり方を構想することになるのである。

使徒書日課(ヤコブ 1章より)

・「ヤコブの手紙」は、冒頭で「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ」を著者として名乗っているが、この「ヤコブ」は、「十二使徒」に数えられる「ゼベダイの子ヤコブ(ヨハネの兄弟)」および「アルファイの子ヤコブ」のいずれでもなく、パウロが「主の兄弟ヤコブ」(ガラ 1:19)として名を挙げている、主イエスの実弟ヤコブ(マタイ 13:55 など)のことであると考えられる。初代エルサレム教会は、主イエスの十二弟子の中でも側近的な扱いをされていたとされる「ペトロ、およびヤコブとヨハネ兄弟」の三人を柱として形成されたと考えられるが、この「ゼベダイの子ヤコブ」が「ヘロデ・アグリッパ」の迫害により殉教すると(使徒 12:1~2)、その穴を埋めるように「主の兄弟ヤコブ」が柱の一つとしての役割を果たすようになったと考えられている。

・この手紙の特徴は、「救われた信仰者としての生き方(実践)」に焦点があることで、一見するとパウロの

多用する「信仰によって義とされる」という主張を全否定しているような論述が見られるため、16世紀改革者M.ルターによって「藁の書」とも呼ばれ、プロテスタント教会では軽んじられてきた歴史がある。しかし、パウロの場合も「信仰によって義とされる」との主張が展開されるのは、「律法によって(ユダヤ人となることによって)義とされる」のではなく「(異邦人もユダヤ人も等しく)信仰によって(神の子とされることによって)義とされる」という救済論が述べられる中でのことであり、「義とされて(信仰によって)新しくされた者にふさわしい生き方」があるということ各所で強く主張しており、ヤコブ書の場合と基本的に変わりはない。

・ヤコブ書でもパウロ書簡でも、救い→新生→聖なる者(神の子)として救いの御業に参加する→新たに救われた者→新しい新生者というサイクル的伝道論を前提としており、このサイクルの初動としての主イエス・キリスト、そして初穂としての初代教会の役割の自覚ということが問われているのである。

福音書日課(マタイ4章より)

・日課箇所は、「荒れ野の誘惑」伝承物語のマタイ版であるが、「マルコ福音書」および「ルカ福音書」同様に、この出来事は主イエスの「洗礼」に続く位置に置かれており、「洗礼者ヨハネ」と「主イエス」の連続性(継承)を強く示唆させるために置かれた場面であると考えられる。すなわち、荒れ野で悔い改めを宣教する働きをなしていた「洗礼者ヨハネ」から「洗礼」を受けられた主イエスは、「洗礼者ヨハネ」の働きを自らのものとなさるかのように「荒れ野」に身を置かれた、というのである。実際の主イエスの公生涯の物語のほとんどが、主イエスは人々の生活の場の中で活動したものと描いており、「荒れ野(=人里離れた所)」にはごくたまに一人祈るために行かれただけで、宣教活動の場とはなさっていない。しかしながら、「荒れ野」で「悪魔の誘惑」を受けられた出来事が、そこで「御言葉」の黙想を深められたことを示唆している通り、ヨハネが「荒れ野」で取り組んだ事柄を、主イエスは人々の生活の場における問題として位置づけし直した、と考えることができるだろう。このことは、「マルコ福音書」の伝える「荒れ野の誘惑」伝承を拡大して三つの誘惑と御言葉を巡る問答として描く「マタイ」および「ルカ」において、より明確であると言えよう。

・マタイ版とルカ版では、三つの誘惑と問答の内容は共通しているが、順序に相違がある。端的に言って、ルカのほうがマタイよりも、「悪魔からの誘惑」をより明示的具体的に描き出そうとしている。また、マタイのほうがルカよりも、福音書全体の物語構想の中での伏線的表示として表現が選ばれていることが明瞭である(「高い山」→17:1、「退けサタン」→16:23など)。

来週の誕生日(2月21日~27日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-390番「主は教会の基となり」は、19世紀英国教会司祭 S.J.ストーンが牧会教育上の必要から信仰告白「教会はキリストの体にして、恵みにより召されたる者の集い」に焦点を当てて作詞。曲は、C.ウェスレーの孫で19世紀英国教会のオルガニストとして活躍したサミュエル・S・ウェスレー(チャールズ・ウェスレーの孫)が「黄金の都エルサレム(Jerusalem the Golden / Urbs Sion aurea)」の歌詞に合わせて作曲したもの。21-101番も同曲。
- ・21-544番「イエスさまが教会を」は、『讃美歌第二編』編纂に際して公募入選した讃美歌。歌詞は、日キ鎌倉栄光教会信徒の石田直矣が家庭礼拝のための歌として作詞。曲は、阿佐ヶ谷教会信徒・小山彰三。
- ・21-476番「あめなるよろこび」(=II 150番)はC.ウェスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475番=I 352番)との組み合わせで歌われてきたが、476番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

21-390「主は教会の基となり」

The Church's one foundation

1. The Church's one foundation / Is Jesus Christ, her Lord; / She is his new creation / By water and the Word. / From heav'n He came and sought her / To be his holy bride; / With his own blood he bought her, / And for her life he died.
2. Elect from every nation, / Yet one o'er all the earth; / Her charter of salvation: / One Lord, one faith, one birth. / One holy name she blesses, / Partakes one holy food, / And to one hope she presses / With ev'ry grace endued.
3. Through toil and tribulation / And tumult of her war / She waits the consummation / Of peace forevermore / Till with the vision glorious / Her longing eyes are blest, / And the great Church victorious / Shall be the Church at rest.
4. Yet she on earth has union / With God, the Three in One, / And mystic sweet communion / With those whose rest is won. / O blessed heav'nly chorus! / Lord, save us be your grace / That we, like saints before us, / May see you face to face.

21-476「あめなるよろこび」

Love Divine, All Loves Excelling

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.